

書評論文

Kazuo Ishiguro : *The Remains of the Day*

(Faber, 1989. 245pp.)

宮 井 敏

第一作の *A Pale View of Hills* (Faber, 1982) は戦後の長崎に住んでいた日本人夫婦の妻、悦子を中心に展開する話である。現在のイギリスでの生活から日本を回想する形をとってはいるが、物語の大半は日本でのこれまでのくらしぶりに描写の力点がおかれているように見える。悦子の夫、二郎はエレクトロニクスの会社の前途有望な社員であり、その父緒方はかつて原爆孤児であった悦子をひきとり、育ててくれた人物。長崎での長い教員生活のあと、故郷の博多でひとりぐらしをしているが、しばしば息子夫婦の新居を訪ねて来る。昔の教え子、それも息子のクラスメートであり、教職につくに当っては紹介までした人物が左翼系の雑誌にはげしい戦争責任追求の記事を書いた事に腹を立てている。戦争と原爆はそこそこに投影してはいるが、真正面に据えられてはいない。悦子はある日、アパートの前にある家に住む佐和子と万里子母子と知り合う。身重である彼女はそれだけに、孤独で激しい性格の万里子を気使うが、母親は米兵と交渉があるらしく、アメリカへ渡る事のみですべてをにかけている。

舞台は一転して静かなイギリスの田園風景の中の一軒家となる。夫、二郎と別れてのち、イギリス人との間に出来た娘、ニキがふらりと訪ねて来る。離婚と再婚のくだり、当時お腹にいた長女景子の自殺、現在の夫のことなどは一切省かれてしまっている。あまりあてもなさそうな渡米にすべてを賭けていた佐和子と、子猫以外の何物も信じなくなっている万里子と、何も語らず、何も残さずに死んでしまった景子の姿がわずかに重なって見える。ここ

を作品全部のキイトとらえる見方もあるうが、貧しかった戦後の日本社会も、静かな現在のイギリスの生活も含めて、すべての周囲の人々を否定もせず、肯定もせず、次々と連鎖的に起って来た出来事をただあるがままに受け入れて来た悦子の姿が淡彩画の中に浮かび上がって来る。小野寺健氏訳『女たちの遠い夏』と云うタイトルはその点、暗示的である。氏は原題の“A Pale View of Hills”を「ほの白き山脈」と訳して居られるが、現実には本文中にも出て来る長崎市外の稲佐の山々のことである。渡英後始めて来日してインタビューに答えた著者は五歳まで育った想像上の長崎を紙の上で再現して見たかったと語り、原風景とピッタリだったと云うその焦点がこの山々であったわけである<sup>1</sup>。

著者は小津安二郎監督の初期の作品にはとりわけ影響を受けたと云うが、この作品などはテンポもゆるやかで、しっかりした筋立てが展開してゆくわけでもなく<sup>2</sup>、登場人物にも現実感が稀薄である。つまり、著者のもつ非西欧的特色が処女作からはっきりと現われているわけで、その点が高く評価されてか、この年の Winifred Hoitby Prize of the Royal Society of Literature という賞を受賞している。

第二作は *An Artist of Floating World* (f & f. London, 1986) である。前作は描写の多くが長崎を舞台にしていたとは云え、執筆の視点はイギリスにあり、日英のハーフが田園風景の中に登場して来たのであるが、今回は物語のすべてが日本にあり、そこを出る事は一度もない。その意味ではイギリス人がイギリスで英語を使って書いた日本の現代小説と云う事になる。

かつて、C. W. Nicol : *Harpoon* (André Deutsch, London, 1987) (邦訳、村上博基『勇魚 (いさな)』) をとり上げた事がある<sup>3</sup>。それは James Clavel の *Shōgun* (McClelland & Stewart Ltd. 1975)<sup>4</sup> 以来の外国人の手になる日本の時代小説であるという点を検討して見たかったからである。

さて、この作品(飛田茂雄訳『浮世の画家』中央公論社)は嫁いだ娘と縁談のある娘姉妹の動きを軸として、地方都市に住む巨匠クラスの老画家の語

りによって進行する。著者自身 interview に答えて、“I like to think I’ve matured as a writer since the first novel; and if that is so, I’m sure it’s because I have far more control over the themes in my second book.”<sup>5</sup> と語っているように、ストーリーの構成力に於ては格段の進歩を見せている。1948年10月、1949年4月、1949年11月、1950年6月、と云う四つのタイトルを掲げた章分けが、長短不揃い乍らも設定してあり、そのほぼ六ヶ月おきの四つの時点のそれぞれからその前を振り返りつつ、次のポイントに進むと云う甚だ手の込んだ運びとなっている。ある時点から物語をスタートさせて、それまでの経過を説明しつつ次へ進んで行く、と云う順行逆序法と呼ばれる手法があるが、これは四つのコマ割りのそれぞれの各所でコマ返しをする形となり、技術的処理もさる事乍ら、全体を通して一気に読ませる力量は新進作家としてなまなかのものではないと思われるのである。

著者はさらに、“The theme of my second novel is the one which eventually emerged as only the subplot of the first novel.”<sup>6</sup> と云っているから、この作品の老画家は前作の元小学校長緒方の再登場と云う事になるろう。つまり、かつて誇りとしていた事が今や恥じねばならぬ事に急変してしまったという、歴史の流れにからみとられてしまった人物が、“We at least acted on what we believed and did our utmost. It’s just that in the end we turned out to be ordinary men. Ordinary men with no special gifts of insight. It was simply our misfortune to have been ordinary men during such times.” と呟く、という点に於て両者は、毎回完結型シリーズ小説の sequent character となっているわけである。

題名の “An Artist of the Floating World” と云うのは本文中にも、“the city’s floating world — the night-time world of pleasure, entertainment and drink which formed the backdrop for all our painting.” とあるようにまさに浮世絵風の題材の事である。そして老画伯はもともとそうした耽美的な世界を追求する画塾に属していたのであるが、次第に飽き足

らなくなり、随所に太い描線を用いるという伝統的な手法の一つではあるが、師の画風にはなじまないと云う (“a traditional enough method, as you will know but one whose rejection was fundamental to Mori-san’s teaching.”) 方向をとり始め、ついに破門される。ところが、その力強いトーンが殺伐な時代の風潮にアピールしてゆき、彼自身の信念もあって戦意昂揚の絵を多数画く事になってしまうのである。戦後元の仲間たちからのきびしい追求に筆を折り、たまたま手に入れた豪邸にひっそりと暮らしているのであるが、その彼の自己批判をどうとらえるか。*British Book News* (1987, May) は “the brooding apologia pro vita sua of an elderly retired painter troubled by his disavowal of the aesthetic philosophy of his teacher and subsequent active support of militarist regime before and during the Second World War.” と云い、朝日新聞書評欄 (63年4月4日付) は「戦中の信念を問う」と見出しを掲げて、老画伯は少くとも信念に従って行動して来たつもりであろうが、問われているのはその信念のありようではないか、と云う。そこで、週刊新潮書評子の云う「カズオ・イングロはいわば遅れて来た戦後派である」(62年1月29日号) との見方も出て来るわけであるが、果して著者が問うているのは「芸術家の戦争責任問題」だけなのであるだろうか。たしかに彼は floating world を対象としてはじめは画業に励んでいたであろうが、その後の戦争協力と云い、戦後の隠退と云い、まさにその時々の流れに身をまかせて float して来た、と云うのが題名の意味する二重の含意であるように思われる。本書の訳者、飛田茂雄氏があとがきで指摘するように、「Aはこう云った」、「しかし、実はBの云った事と混同しているかも知れない」、「だがやはり、考えて見るとAの云った事に違いない」と云う “But”, “But then” 形式の論理展開が皮相的な卒読を拒んでおり、その内懐の深さが前作にもまして、読者にアピールし、高い評価をうける事となったものである。

*The Bookseller* (1987 Jan. 16) は Attorney general, film producer,

author, poet, fashion designer 及び Archbishop of Canterbury から成る審査員が Whitbread Book of the Year (1987) に値すると決定したと報じている。

さて話題の第三作である。(Faber, 1989, May), (Knopf 1989 Oct.) (邦訳, 土屋政雄『日の名残り』中央公論社) 貴族の館に勤める老執事を語り手として本文中にも “It is sometimes said that butlers only truly existed in England. Other countries, whatever title is actually used, have only manservants.” (Prologue) とあるように、今回はさきの二つの作品で著者の日本人としての identity に決着をつけた上で、まさにイギリス的なもの、そのものを取り上げている。第二作が四つのポイントを時系列に配置して plot を進めて来たように、これも、1956 July を Prologue として、Day One から Day Six まで八つの章に分かれている。違っているのは、London 西郊と思われる Darlington Hall から西へ Cornwall の Weymouth まで空間的に移動する構成をとっている点である。主人から借りた Ford の Vintage car に乗って Salisbury, Dorset, Taunton, Tavistock, Little Compton と泊りを重ねて drive を続ける主人公は、前作と同じく回想形式によって、華やかかなりし貴族社会の最後の全盛時代を語り部のように淡々と物語って行く。

今、主人より借り物の Ford と云ったが、実は二世紀に及ぶ由緒ある Darlington 卿の御屋敷はアメリカ人実業家の Farrady 氏の手に残っており、館ごと引取られた執事 Stevens は従来の四分の一の人数でこの広大な建物を維持するのに苦慮している。たまたま与えられた休暇を利用して彼は、ずっと以前に辞めて、Dorset に嫁いだ Housekeeper からの手紙に感觸を得て、安否を訪ねがてら再就職をすすめて見ようと思い立ったわけである。ゆっくりしたこの sentimental journey での期待は今の Mrs Benn, 昔の Miss Kenton との再会であり、回想は1922年から仕えていた Lord Darlington のこと、彼が主催した behind-the-scenes meetings between powerful poli-

ticians (TLS 1989 May 19—25) を陰から支えた自分自身の獅子奮迅の働きぶり、そしてそこから拙き出される理想の butler とは何か、と云う議論、と云う事になる。

Lord Darlington と Butler Stevens の活躍のピークは、1923年3月の（もちろん非公式の）国際会議である。卿は自ら “I fought that war to preserve justice in this world. As far as I understand, I wasn't taking part in a vendetta against the German race.” と語るように、第一次大戦後の敗戦国ドイツに対するあまりにも苛酷な賠償が結局はドイツを追い詰める事になる、との判断からドイツ大使をはじめ仏、米、伊等関係各国の有力政治家を Darlington Hall に集めて “hardest terms” と云われた Versailles Treaty (1919年7月) の緩和をはかろうとする。時の英首相 Lloyd George 提案の Great Conference in Italy (1922年4月10日開催のジュノア会議を指すものと思われる) が不調に終わった（5月19日か）のを受けて、次に予定されている a further great conference scheduled to take place in Switzerland the following year (ローザンヌ会議のことか) の間にこの informal な実力者会談が企劃された形になっている。そして、アメリカの上院議員 Lewis の辛辣な発言, “He is a gentleman. A Classic English Gentleman. Decent, honest, well-meaning. But, His lordship here is an amateur.” と云う言葉によって、卿の主観的意図はさておき、会談は暗礁に乗り上げてしまう。複雑極まる利害の錯綜する国際政局はもはや平和と正義を愛するイギリス貴族の手におえるような代物ではなくなっていたのである。“His lordship is a dear, dear man. But he is being made a fool of.” と嘲けられ, “Herr Hitler, through our dear friend Ribbentrop, has been manoeuvring his lordship like a pawn.” と極めつけられ、戦後になると, “A great deal of nonsense has been spoken and written in recent years concerning his lordship and the prominent role he came to play in great affairs, and some utterly ignorant reports have had it that

he was motivated by egotism or else arrogance.”と云う評価が下されてしまう。しかし、舞台裏から Darlington を支えていた Stevens は屈しない。傍にいて真相をとくと知っている生き証人は “Let me say that nothing could be further from the truth.” 或は, “Then let me make it clear that nothing could be further from the truth.” と云って動じないのみならず, “The great majority of what one hears said about his lordship today is, in any case, utter nonsense, based on an almost complete ignorance of the fact.” と叫んでジャーナリズムを含めたイギリス大衆の誤れる思い込みのスケープ・ゴートになっている 卿を救おうとする。Herr Ribbentrop の巧みな駆け引きに取り込まれたのは何も卿だけではない, “The truth is that Herr Ribbentrop was, throughout the thirties, a well regarded figure, even a glamorous one, in the very best houses.” だった筈だと云い, “I do not suppose they would speak quite so readily if, say, *The Times*, were to publish even one of the guest lists of the banquets given by the Germans around the time of the Nurenberg Rally.” と積極的に反論さえしている。この点、『朝日ジャーナル』が翻訳に先立って (1989年6月23日号) 「残照」と云う訳名でこの作品をいち早く紹介したのはよいとして, 「しかし、偉大な筈の主人が戦争協力者であったと云う事実を知るに到り, スティーヴンズは一生を賭して追求した価値が欺瞞に満ちたものだったと悟る」とあるのは事実<sup>1)</sup>に反する<sup>2)</sup>。卿の子飼いの友人 Mr. Cardinal が “You must have seen it, Stevens. You must have seen it.” と叫ぶように Stevens は終始一貫すべてを知っていたのである。

では、彼が「生涯を賭して追求した価値」とは何か。それは、lordship と butler の関係が相互の “dignity” をもって結ばれるべきだ、と云う事につきる。彼はドライブの泊りごとに、自身の父親も含めて、名立たる城館に長年勤務した名執事たちのエピソードを次々と回想するのであるが、彼の求める理想の執事はその中にはいなかった。伝来の銀器をピカピカに磨き上げる

事で名を得た人、博識多才で有名だった人、誰しも手こずるグータラ貴族どもを手もなくあしらう事を誇りとした人、等々色々ありはしても、結局、国家の大事に陰ながらも尽瘁する程の主人をさらに陰ながら支えて粉骨砕身する召使頭こそ butler の理想像でなければならぬ、というのが彼の結論であったのである。思い出されるのは、George Orwell が *Homage to Catalonia* (Secker & Warburg, 1938) の中で、人間の資質として最も問われるべきものは “human decency”<sup>8</sup> である、とのべている事である。Lord Darlington は不遇の内になくなり、その館はアメリカ人の手に移った。Mr Stevens の憧れてやまなかったイギリスの伝統的価値観も今や求めるすべもない有様である。“an assembly of witty weekend guests. Tea at 4; whisky and soda at 6. A sumptuous meal, with candlelight glancing off starched white shirtfronts, bare shoulders and glittering jewelry.” (*Time*, Oct. 30, 1989) はもはや夢の中でしか活躍出来ぬ世界かも知れない。それでも、変転極まらない世界と人間関係にあって、唯一信ずるに足るものは相互の信頼関係、つまり human decency だけである、と著者は Stevens の発言と行動を通して主張しているようである。

作家富岡多恵子が「なぜこの程度の小説が英国で名誉ある賞を受けるのかわからない」と云い、評者三浦雅士もこれに同意して引用している（『週刊文春』文春図書館、1990年7月12日）のであるが、イギリス的な、あまりにもイギリス的な世界を、しかも tragicomedy の形をとりつつ、“a resonant political and personal metaphor” (*Newsweek*, Oct. 30, 1989) によって “British class-system を insidiously に indict” (同書) しているのだとすれば、前二作と比較して多少我々の理解を妨げる面があるのかも知れない。しかし、イギリス文学の伝統の中核にもつながる美しい自然描写、歴史への強い関心、倫理性などがこの作品に高い評価をもたらした（『週刊読書人』1990年8月27日）と見るべきであろう。

London で活躍した日本人は今年で生誕百年を向える劇作家、演出家の郡



虎彦<sup>9</sup> (本名菅野二十一) 以来, *Balloon Top* (1987) を書いたアルベリイ・信子氏 (前アイバン・モリス・コロンビア大教授夫人) まで数少なくはないが<sup>10</sup>, これを奥野健男氏のように行詰った西洋の小説に対して, いわば「主客合一の心象風景」を呈示する日本の近代小説がかえって新たな刺激を与えている (『朝日新聞』1973年2月5日) と見るか, 現代イギリス文学そのものの活力の衰退と見るか, は論の分れるところであろうが, 後者に非白人作家の活躍が目立っているのは事実である。カリブ海出身のナイブホ, 「悪魔の詩」で一躍名を馳せたインド出身のサルマン・ルシュディ, 南アのナディン・ゴードイマ, 少し古いが, Vidiadhar Surajprasad Naipaul など, 植民地帝国の崩壊が旧英領植民地育ちの英語作家の逆流を呼んでいるわけである。外国生れで英国籍をもつ人々の基礎数が飛躍的に上昇している事がまず考えられるが, 編集者, 出版者の世代交替が急速に進んで来たためにイギリス中心の物の見方, テーマのえらび方に激変が起っている事も上げられよう。そして, そうした ethno-centric な attitude の放棄が今後のイギリス文学にとって, プラスに働いて, より豊かな世紀末文学として開花するか, マイナスに働いてひさしを借して母家をとられるていの主体性の喪失, 伝統の消滅となるか, この十年の動向が注目されるところである。

## 注

- 1 『朝日ジャーナル』1990年1月5日・12日号
- 2 「云って見ればただそれだけの, 筋らしい筋もない, 淡々としたロンドン近郊の風物の淡彩のスケッチのような, いわばそんな小説である」, 拙稿「書評, Elizabeth Taylor : *The Wedding Group*」1969年3月『人文学』110号。
- 3 拙稿「書評, C. W. Nicol : *Harpoon*」1987年8月, 『同志社大学英語英文学研究』43号。
- 4 hardcover, paperback 合せて800万部を売ったといわれている。同上稿参照
- 5 *Books and Bookmen* 1985 Nov. p.33
- 6 *ibid.*
- 7 上記 E. Taylor の当時の評判作 *The Wedding Group* を取上げたのは, たまたまロンドン滞在中に読み終えたこの作品について日本から送られて来た『朝日ジャーナ

ル』1968年6月23日号「文化ジャーナル、イギリス小説の問題」と云う記事に「結婚するグループ」とあったためである。本文中に再三明らかなように“Wedding group”と云うのは Wedgewood の陶皿の図柄の一つで、式後のつどいを現わしている。事実、作品中に結婚は一回しか行なわれていない。そこで「この記事は読まないで書評したのではないか」と指摘した。

8 “common decency” とも云っている。

9 彼は1917年 London, Criterion Theatre で *Kanazwa* (能「鉄輪」) を上演し、1922年には *The Toils of Yoshutomo* (「義朝記」) を London, Little Theatre で上演したが、九十をこえる劇評が賞讃したと云われている。

10 1988年九月号の『文学界』に「日本語で書くことの意味」という対談を柄谷行人氏と行なっている「リービ英雄」氏は日本人ではない。